

日本版 SICS を用いた園内研修の現状と課題 — 幼稚園と保育所への質問紙調査を通して —

芦田 宏、門田理世¹、野口隆子²、箕輪潤子³、秋田喜代美⁴、鈴木正敏⁵、小田 豊⁶、淀川裕美⁷

人間環境部門、西南学院大学¹、十文字学園女子大学²、川村学園女子大学³、東京大学大学院⁴
兵庫教育大学⁵、国立特別支援教育総合研究所⁶、東京大学大学院博士後期課程⁷

Current Conditions and Issues of In-School Staff Development Using the Japanese Version of SICS: Through Analysis of Surveys for Kindergartens and Day Nurseries

Hiroshi ASHIDA, Riyo KADOTA¹, Takako NOGUCHI², Junko MINOWA³, Kiyomi AKITA⁴,
Masatoshi SUZUKI⁵, Yutaka ODA⁶, Yumi YODOGAWA⁷

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Seinan Gakuin University¹, Jumonji University², Kawamura Gakuen Woman's University³,
Graduate School of Education, University of Tokyo⁴, Hyogo University of Teacher Education⁵,
National Institute of Special Needs Education⁶, Graduate School of Education, University of Tokyo⁷

Abstract

This study speculated how to vitalize in-school staff development using the Japanese version of SICS (Self-evaluation Instrument for Care Settings). A questionnaire was distributed to the early childhood care and education facilities that had obtained the booklet of Japanese SICS. As a result, using Japanese SICS contributed to vitalize their staff development; discussions during in-school teacher development sessions became more active, various opinions arouse, and cooperative, reciprocal learning occurred among staff members. However, because of differences between self-evaluation guidelines of early childhood facilities by Ministry of Education and Ministry of Welfare, there are different approaches and directions of discussions between day nurseries and kindergartens, and it was concluded that such differences should be adjusted to lead discussions and staff development sessions for the future.

keywords: SICS, self-evaluation, in-service training, kindergarten, day-care center

1. はじめに

幼稚園においては、平成19年の学校教育法施行規則の改正によって学校評価が、また保育所に関しては平成20年の保育所保育指針の告示によって、保育士等及び保育所の自己評価並びにその公表が努力義務として位置づけられた。ともにそれぞれのガイドラインが公表されており、教育水準、福祉サービスの向上が目指されている。

「幼稚園における学校評価ガイドライン」においては、各学校の教職員が行う「自己評価」、保護者、地域住民などの学校関係者で構成された評価委員会等が自己評価の結果について評価を行う「学校関係者評価」、学校と関係ない専門家による「第三者評価」の3つが、評価の形態としてあげられている(文部科学省, 2008)。「保育所における自己評価ガイドライン」においては、「園内研修」に

よる「保育所の自己評価」と、外部評価である「第三者評価」が自己評価の柱になっている(厚生労働省, 2009)。また、幼稚園における学校評価においては、重点的に取り組むことが必要な目標や計画の取り組み状況の評価に視点が置かれているのに対して、保育所の自己評価においては、保育士等が自己評価を通してその専門性の向上や保育実践の改善に努めることに焦点が当てられており、評価活動の重点が異なっている。しかし、中心となる自己評価活動は、「全教職員」「保育士等」が行う評価活動であり、その活動の中心は「園内研修」と言える。

したがって、園内研修が有意義に行われ、活発化することは、自己評価活動にとっても重要なことであり、それは幼稚園、保育所両者に共通の課題であると言える。そのために、われわれ研究チームでは、ベルギーのリュウベン大学 Ferre Laevers 教授が開発した SICS (Well-being and involvement in care process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)の着想に基礎をおき、理念を踏襲しながらも、Laevers 教授の許可を得た上で日本の状況に合わせて改変した日本版 SICS の開発を進め、その成果として 2010 年に『子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—』というブックレットを作成し、園内研修の活発化と保育の質の向上に寄与することを目指した。そして、おおよそ半年後に、ブックレット購入者を対象に質問紙によって、日本版 SICS が園内研修にどのように影響を与えているかを調査し、日本版 SICS を用いた園内研修の現状と課題についての検証を行った。

2. 方法

2.1 日本版 SICS とは

質問紙調査について述べる前に、日本版 SICS についてふれておく。オリジナルの SICS は上記のように Laevers 教授たちが開発したものである。それを支えているのは、1970 年代から研究と実践を進めてきた Experiential Education の教育思想である。この思想は、教育現場において子どもたちが経験していること、そのこと自体に焦点を当て、そこに子どもたちが参加していること、そこで生きていることが何を意味しているのかを注意深く検証することを通して形成されてきたものである。したがって、保育の質を議論するとき、図1に示すように保育の文脈(context) や方法(means)に焦点を当てたり、保育の成果(outcomes)に着目したりするが、SICS では、保育の過程(process)に目を向けるのである (Laevers, F., 2004)。

そして、その保育の過程において、子どもたちが「い

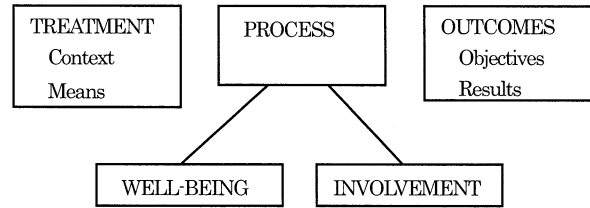


図1 SICSの基本理念 (Laevers, F., 2004)

かに居心地良く感じているか(well-being)、「いかに活動に夢中になっているか(involve-ment)」の二つの側面から保育の質を自己評価し、改善を図ろうとするのである。

(Laevers, F. Ed., 2005a, 2005b)。保育の質を評価する尺度としては、主に客観的に計測可能な物理的環境ならびに保育のあり方についての分析・数値化をする ECERS (Early Childhood Environmental Rating Scale: 埋橋玲子訳『保育環境評価スケール① 幼児版』) や、教室における教師のかかわりのあり方を主眼におき、いかに子どもたちの思考を発展させているかどうかを見極める CLASS (Classroom Assessment Scoring System) などがあるが、これらアメリカで開発された尺度が、どのような環境やかかわりが望ましいかが規定された上に成り立っているのに比べて、SICS は保育の方法や理論に依拠する部分が少なく、さまざまな保育方法が並立している日本の保育現場にはふさわしいものであると考えられる。

実際の手順としては、3つの段階で構成されている。Well-being と Involvement の状態を評定する原則5段階のスケールが設けられており、オリジナルでは、第1段階として評定者が、子ども一人あたり2分以内で評定し、簡単なコメント書くようになっている。1回の評定において10名を対象とし、クラスの人数が20名以内の場合は異なる日の異なる時間帯に残りの子どもたちを同じように評定を行う。20名以上のクラスの場合は、1回目の評定の後に追加で10名の評定を行い、2回目には残りの子どもたちの評定を行う。オリジナルは、この短時間での評定を「スキヤニング」と表現している。しかし、日本版では2分という短い時間ではなく、「エピソード」として一定の時間帯の子どもの様子を記録し、その様子を Well-being (「安心度」と訳した) と Involvement (「夢中度」と訳した) の視点で評定するようにした。このように変更したのは、日本においては、園内研修で特定の子や、特定の保育者の保育を取り上げて事例研修を行うことは珍しいことではなく、保育記録を取って議論を行うことに保育者たちは親しんでおり、スキヤニングという短時間での評定よりも適していると考えたからである。したがって、この第1段階では、観察者からのエピソードの説明と、安心度と夢中度について、なぜその評定に

なったのかの理由などについての議論を通して参加者全体で観察された保育の場面、状況についての共通理解を図る。

第2段階は、観察された内容を分析する段階である。これは、基本的にオリジナルと同じ項目で分析を行う。安心度と夢中度が高かったのは、また低かったのはどうという理由からなのかを「豊かな環境」「集団の雰囲気」「自発性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり」の5つの観点から分析する。安心度や夢中度を高めた要因は、今後の保育においても継続していたり、意図的にそのような状況を作り出して行ったりする指針を示してくれるものとなる。一方、低くしていた要因は、今後の保育において改善していくポイントを明らかにしてくれるものである。

第3段階は、二つの要素で構成されている。第2段階で分析された保育を改善していく方法を決定する前に、そもそも行われていた保育全体の振り返りをチェックリストによって行い、うまく行われ、配慮されている点と見過ごされてうまく機能していない点を明らかにするのが一つ目の要素である。日本版のチェックリストは「豊かな環境」「子どもの主体性－自由と参加－」「支援の方法－保育者の感性と関わり－」「クラスの雰囲気－集団内の心地よさ－」「園・クラスの運営」「家庭との連携」の6つの視点のもとに64のチェック項目で成り立っている。この6つの視点のうち「家庭との連携」を除く5つは第2段階の視点と基本的には同じものである。表現と順序が異なっているが、オリジナルに準拠している。また、各チェック項目は基本的にはオリジナルの翻訳ではあるが、文化的に日本の状況に合わないものに関しては日本の状況に合うように変更し、6つめの視点である「家庭との連携」は項目ともに新たに加えたものである。二つ目の要素は、第2段階での分析とチェックリストによる保育自体が持つ性格を踏まえて、具体的に改善する事柄を決定することである。改善したい目標を達成するための具体的な行動を、いつまでの期間で行うのかを決定する。そして、設定期間が過ぎたら、目標が達成できたのかを評価し、新しく第1段階に戻るサイクルとなる。日本版では、この二つ目の要素の中に、「現状で優れているところ」という項目を設け、各園の保育の中で優れている点を常に見失うことなく、より良い保育への改善点を見いだせるようにしている。

2.2 質問紙調査

2.2.1 対象者

ブックレットは書店販売ではなく、パンフレット等に

よって周知を行い、発売元へ直接購入申し込みを行う形で販売を行ったので、購入者の住所等の記録があった。そこで、購入者を対象に質問紙を配布し、無記名での回答をお願いした。配布は2010年10月中旬、最終返送は11月中旬であった。配布数は93である。

2.2.2 質問紙の内容

質問紙の主な内容は、回答者の所属、職位などの属性を問うた後、「平素、貴園では、どのような園内研修をされているか教えてください」「『子どもの経験から振り返る保育プロセス』を使ってみて感じた率直な感想を教えてください」「これまでの園内研修との違いについて教えてください」の3つの質問に対しては自由記述での回答を求めた。そして、以下の観点に関して、それぞれにいくつかの質問項目を設け、ブックレットを使ってみて感じたり、思ったりしたことを「とてもそう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答を求めた。

- ・保育者の自己評価について
- ・園全体での利用に関して
- ・子どもの経験を捉える視点について
- ・尺度の理念理解や利用しやすさについて

3. 結果

3.1 分析対象

配布数93に対して、回答数30、回収率32.3%であった。回答数は30であったが、実際に使用して試みた回答は幼稚園12、保育所（園）（以下、行政用語である「保育所」に統一する）7であったので、この合計19の回答に関して分析を行った。

回答者は幼稚園12のうち9園（75%）が、保育所は7園中6（86%）が園長か主任であり、園の運営に関与している方からの回答が多かった。

3.2 自由記述回答のまとめ

自由記述の回答の中には複数の要素が含まれている。その要素部分をカテゴリー化し、集計した。したがって、回答者数と回答数は一致しない。また、幼稚園と保育所の違いを見るために、別々に集計した。

3.2.1 平素の園内研修

幼稚園は「園内研究保育」「事例研修会」「年間研修テーマの設定」という回答が多かった。保育所も「園内研究保育」「事例研究」は比較的多いが、年間の研修テーマを設定しているよりもその時々「個別テーマでの研修」の方が多い。

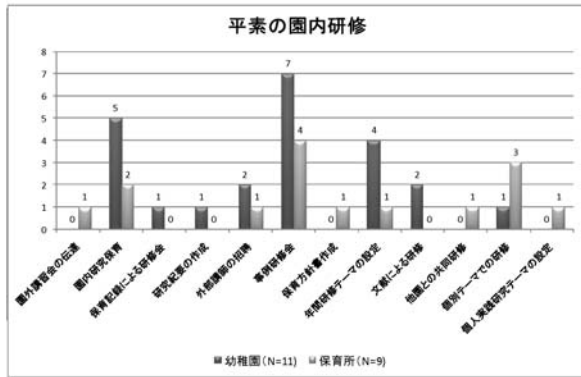


図2 平素の園内研修

3.2.2 使用して試みるの感想

「使用後の感想」を自由記述で書かれていたものをカテゴリー化し、まとめたものが図3である。回答数が少なく、分散しているが、幼稚園の場合、「自園での実施方法を検討している」という回答が7園中3園からあった。その他では、「保育を振り返る契機となる」「意見が出やすく、共通理解がはかれた」「園内研修で役に立っている」「改善点が明確になる」などの回答であった。「映像を見ての意見に経験の差があった」というものがあるが、これはブックレットに添付しているDVDの映像を見て研修されたの回答と思われる。

一方、「知らない子どもについては限界がある」「項目が多くて継続が困難」というブックレットの課題を述べた回答もあった。

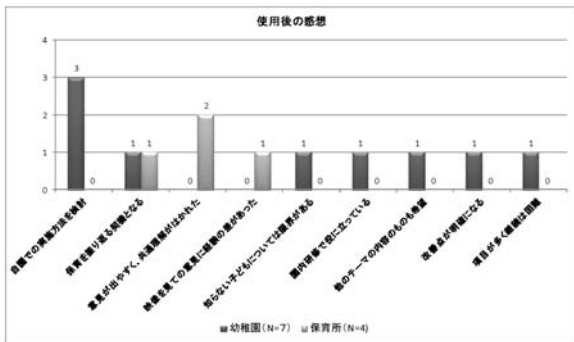


図3 使用後の感想

3.2.3 これまでの園内研修との違い

日本版SICSを用いたことによって園内研修がどのように変わったかについての結果は図4である。保育所の回答は分散しているが、幼稚園の回答は一つのかたまりを形成しているように思われる。「共通で、具体的な視点を持つことが出来た」が最も多く、「形にとらわれずに気

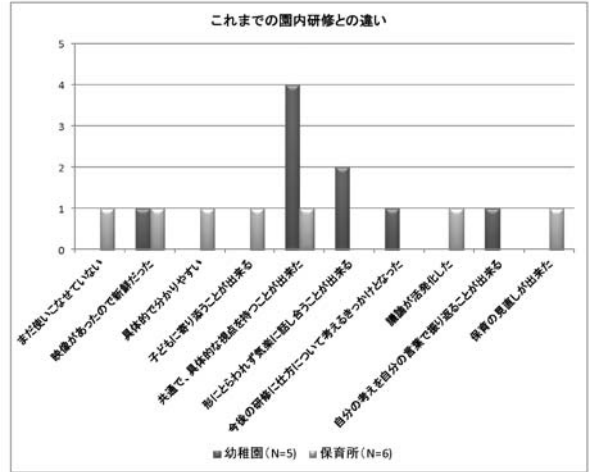


図4 これまでの園内研修との違い

楽に話し合うことが出来た」「自分の考えを自分の言葉で振り返ることが出来る」と続く。保育所における園内研修の様子の変化に関しては幼稚園と同じく「共通で、具体的な視点を持つことが出来た」という回答があり、「議論が活発化した」というものもある。「保育の見直しが出来た」という日本版SICSの効果を述べた意見もあった。

3.3 日本版SICSを用いることの効果について

日本版SICSを用いることによって得られる効果についていくつかの観点で質問項目を立て、「とてもそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で回答を求めた。結果は次のようなものであった。

3.3.1 保育者の自己評価について

「保育者の自己評価について」の各質問とその結果を幼稚園と保育所に分けて示すと、図5と図6になる。幼稚園の方が保育所より少し厳しい評価をしている。しかし、「とてもそう思う」「そう思う」のどちらかを回答した園の数を見てみると、保育所の「自分の保育の良い点を見つけることができた」が6園中2園(33.3%)と低い以外、幼稚園の「子どもの経験から保育を振り返り、改善することができた」が12園中8園(66.7%)、保育所の「次の保育につなげることができた」が6園中4園(66.7%)で低いと言うものの2/3の園が肯定的な評価を行っている。特に「自分の気付きや子ども理解が変化した」は幼稚園で12園中9園(75.0%)、保育所では100%であり、「保育を自己評価するのに有効であった」は幼稚園では12園中11園(91.7%)、保育所では100%が肯定的な評価をしている。

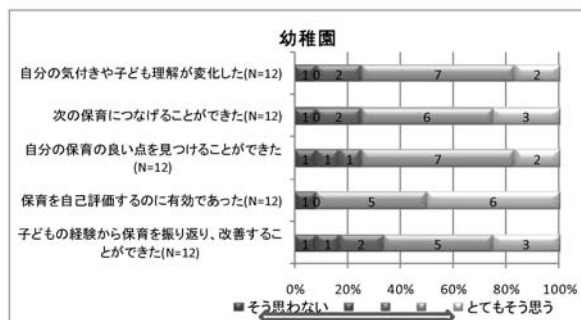


図5 保育者の自己評価について－幼稚園－

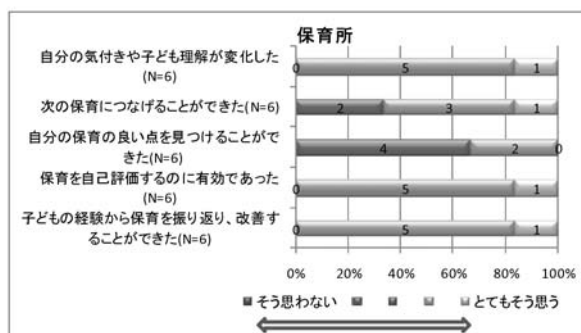


図6 保育者の自己評価について－保育所－

3.3.2 園全体での利用

「園全体での利用に関して」の結果が図7と図8である。「園全体で用いることは難しい」という質問は、他の質問と反対に、「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計を集計したところ、幼稚園では11園中7園(63.6%)、保育所は7園中4園で(57.1%)で他の項目に比べて相対的に低かった。

しかし、「そう思う」と「とてもそう思う」を集計した「保育経験にかかわらず意見を述べる事ができた」が、幼稚園では11園中8園(72.7%)、保育所では7園中6園(85.7%)。「様々な意見にふれることができた」は幼稚園が11園中9園(81.8%)、保育所は7園中6園(85.7%)。「保育者間で話し合いの機会を持つことができた」は、幼稚園は11園中9園(81.8%)、保育所は7園中7園(100%)。

「保育者同士で子どもの姿やエピソードの内容を共有できた」は、幼稚園11園中10園(90.9%)、保育所は7園中6園(85.7%)であり、園内研修における意見の出しやすさが、多様な意見の出現を促しており、情報交換に効果が出ている結果となっている。

また、「他の保育者から刺激を受けた」では、幼稚園が11園中9園(81.8%)、保育所が7園中6園(85.7%)であり、「同僚とともに学びあうことができた」は、幼稚園11園中9園(81.8%)、保育所は7園中7園(100%)であり、園内研修が学びの場となっている結果となっている。

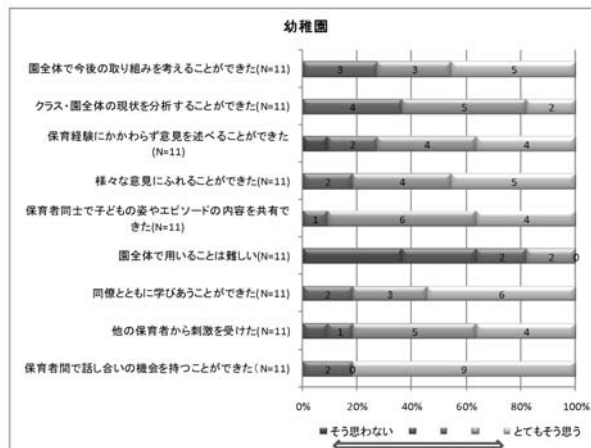


図7 園全体での利用に関して－幼稚園－

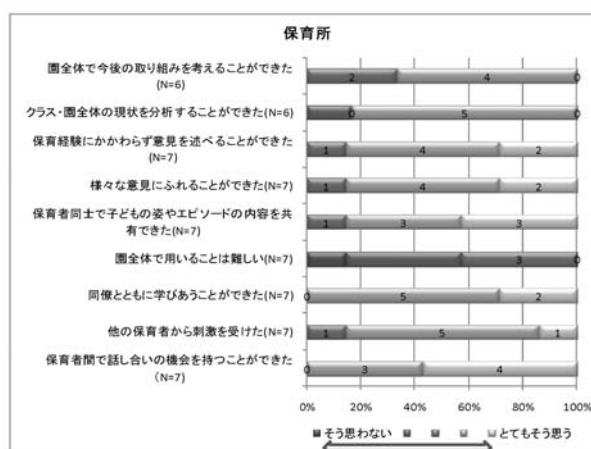


図8 園全体での利用に関して－保育所－

ただし、やはり園全体での使用に困難さを感じているために「クラス・園全体の現状を分析することができた」は、幼稚園11園中7園(63.6%)、保育所は6園中5園(83.3%)、「園全体で今後の取り組みを考えることができた」は、幼稚園11園中8園(72.7%)、保育所は6園中4園(66.7%)と、他の項目に比べて相対的に低い回答になっている。

3.3.3 子どもの経験を捉える視点について

SICSの特徴は子どもの今の状態を「安心度」と「夢中度」の2つの視点から捉えていく点である。「子どもの経験を捉える視点について」は、まさにその視点がどのような作用を保育に及ぼしているのかの質問である。結果は、図9と図10である。

結果として、SICSの中の用語が質問に入っている「保育の中で子どもの『夢中度』や『安心度』を意識した」に対して、幼稚園は12園中12園(100%)、保育所は7園中6園(85.7%)が「そう思う」か「とてもそう思う」と回

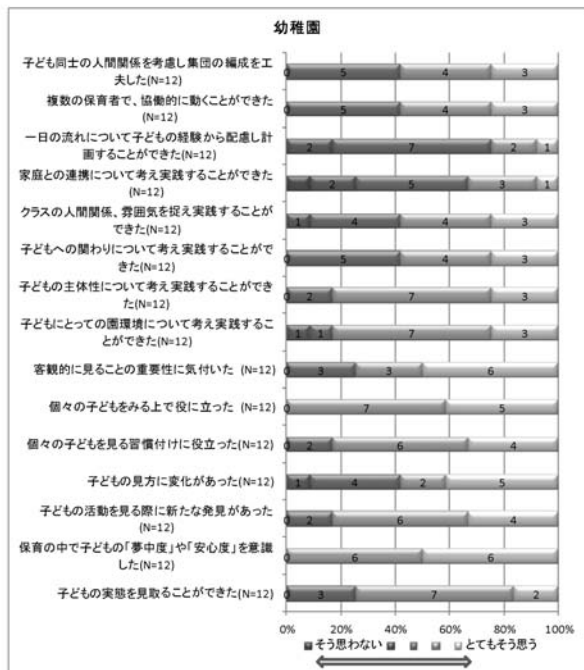


図9 子どもの経験を捉える視点について—幼稚園—

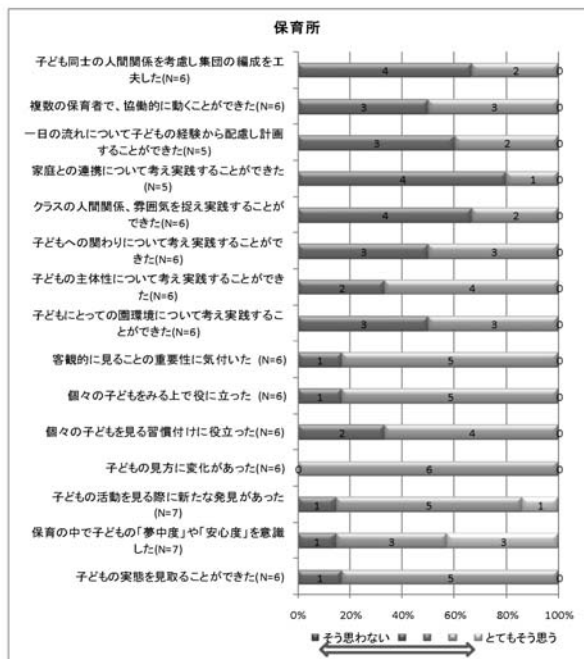


図10 子どもの経験を捉える視点について—保育所—

答しており、日常の保育中においても SICS の視点を意識していることが分かる。その内実として幼稚園と保育所に共通して高い回答のあった質問は、「客観的に見ることの重要性に気付いた」(幼稚園: 12園中9園、75.0%、保育所: 6園中5園、83.3%)、「個々の子どもをみる上で役に立った」(幼稚園: 12園中12園、100%、保育所: 6園中5園、83.3%)、「子どもの活動を見る際に新たな発

見があった」(幼稚園: 12園中10園、83.3%、保育所: 7園中6園、85.7%)、「子どもの実態を見取ることができた」(幼稚園: 12園中9園、75.0%、保育所: 6園中5園、83.3%)の4つである。

保育所に比べて幼稚園が高い回答をしたものは、「子ども同士の人間関係を考慮し集団の編成を工夫した」(幼稚園: 12園中7園、58.3%、保育所: 6園中2園、33.3%)、「クラスの人間関係、雰囲気をつかえ実践することができた」(幼稚園: 12園中7園、58.3%、保育所: 6園中2園、33.3%)、「子どもの主体性について考え実践することができた」(幼稚園: 12園中10園、83.3%、保育所: 6園中4園、66.7%)、「子どもにとっての園環境について考え実践することができた」(幼稚園: 12園中10園、83.3%、保育所: 6園中3園、50.0%)、「個々の子どもを見る習慣付けに役立った」(幼稚園: 12園中10園、83.3%、保育所: 6園中4園、66.7%)の5つの質問である。一方、幼稚園に比べて保育所が高い回答をしたものは、「子どもの見方に変化があった」(幼稚園: 12園中7園、58.3%、保育所: 6園中6園、100%)の1つである。

幼稚園、保育所ともに相対的に低い回答だったのは「複数の保育者で、協働的に動くことができた」(幼稚園: 12園中7園、58.3%、保育所: 6園中3園、50%)、「一日の流れについて子どもの経験から配慮し計画することができた」(幼稚園: 12園中3園、25%、保育所5園中2園、40%)、「家庭との連携について考え実践することができた」(幼稚園: 12園中3園、33.3%、保育所: 5園中1園、20%)、「子どもへの関わりについて考え実践することができた」(幼稚園: 12園中7園58.3%、保育所: 6園中3園、50%)の4つの項目である。

3.3.4 尺度の理念理解や利用しやすさについて

日本版 SICS を利用しての効果について多くの質問をしたが、利用しやすいかどうかも重要な点である。そこで、尺度の理念理解や利用しやすさについて質問した結果が、図11と図12である。幼稚園、保育所ともに高い回答だったのは、「保育の質の向上に役立つ」(幼稚園: 12園中11園、91.7%、保育所: 7園中6園、85.7%)だけで、残りすべての項目に対しては保育所の方が高い回答であった。「楽しく利用することができる」(幼稚園: 12園中5園、41.7%、保育所: 7園中6園85.7%)、「継続的に利用できる」(幼稚園: 12園中6園、50.0%、保育所: 7園中5園、71.4%)、「ブックレットはためになった」(幼稚園: 12園中8園、66.7%、保育所: 7園中7園、100%)、「保育で利用しやすい」(幼稚園: 12園中5園、41.7%、保育所: 6園中5園、83.3%)、「ブックレッ

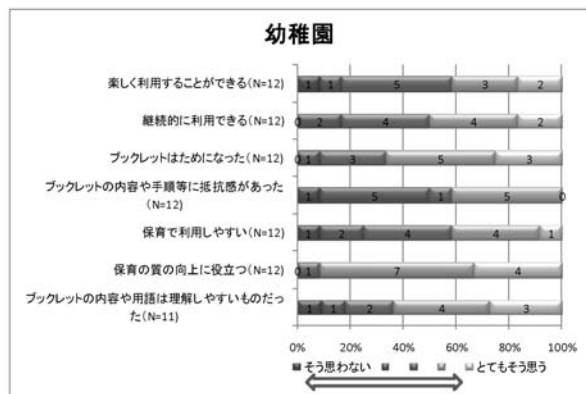


図 11 尺度の理念理解や利用しやすさについて—幼稚園—

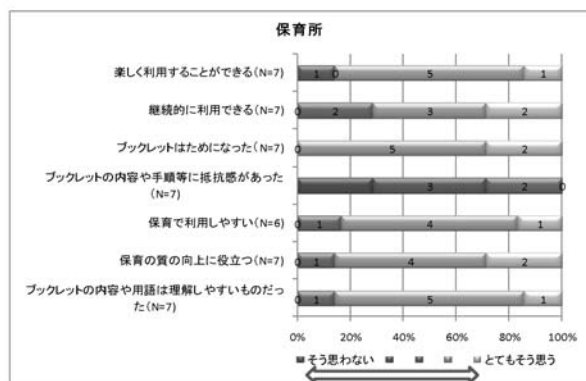


図 12 尺度の理念理解や利用しやすさについて—保育所—

トの内容や用語は理解しやすいものだった」(幼稚園: 11園中7園、63.6%、保育所: 7園中6園、85.7%)、そして、「ブックレットの内容や手順等に抵抗感があった」については、「あまりそう思わない」か「そう思わない」を集計すると、幼稚園は12園中6園で50.0%、保育所は7園中5園で71.4%である。

4. 考察

4.1 幼稚園と保育所の違い

今回の質問紙調査は日本版 SICS の導入が園内研修にどのように影響を与えるのかについて行ったものであるが、幼稚園と保育所では、異なる点があることも明らかになった。

まず、日本版 SICS の受け入れに関してである。「尺度の理念理解や利用しやすさについて」において、多くの項目で保育所の方が高い回答を行っていたが、これは「平素の園内研修」と関係していると思われる。幼稚園、保育所ともに研究保育、事例研修を中心としており、研修の内容は似ているが、年間の計画を立てた研修を行っているのが幼稚園であった。「保育記録による研修会」「研究紀要の作成」「文献による研修」なども行われており、園としての研修計画がそれぞれの園で確立していると言

える。一方、保育所の場合は、年間計画を立てているところや、「保育方針書作成」を行っているところもあるが、「園外講習会の伝達」「他園との合同研修」「個人テーマの設定」などが見られ、園としての年間の研修テーマの追求という姿は弱いように思われる。別の見方をすれば、保育所の方が柔軟な研修体制を取っており、新しい自己評価法の取り入れやすい体制にあると言えるのではないだろうか。

このことは、勤務形態の違いが影響していると思われるが、その実態をふまえるかのように、「保育所における自己評価ガイドライン」では「勤務時間等の状況に配慮して、複数のグループに分かれて比較的短時間の交替制で実施する、書類の増加を最小限にするなどして、自己評価が過重な負担とならないように工夫することが望まれます (厚生労働省, 2009, p.7)」と記載されており、一方「幼稚園における学校評価ガイドライン」では、「自己評価は、園長のリーダーシップの下、全教職員が参加して組織的に取り組むことが重要である (文部科学省, 2008, p.6)」と書かれている。このように、勤務形態が、研修会の開催や、年間計画の設定に影響を及ぼしていると考えられる。

したがって、平素から研修体制が確立している園では、新しいものを途中から入れていくことが難しいことが予想され、「使用後の感想」への回答に幼稚園3園が「自園での実施方法を検討」と回答していたが、この3園のうち2園が「ブックレットの内容や手順等に抵抗感があった」に対して「そう思う」と回答しており、1園が「ブックレットはためになった」に「あまりそう思わない」と回答している。結果として、日本版 SICS の導入に慎重な幼稚園と柔軟な保育所という回答につながっていると考えられる。

また、「子どもの視点を捉える視点について」の質問で幼稚園の方が、子ども同士の間関係や、クラスの間関係、子どもにとっての園環境などの項目で高い回答をしていたが、この違いにもそれぞれの自己評価ガイドラインないしは日常の保育のあり方が影響している可能性を感じさせる。幼稚園の学校評価ガイドラインは、重点的に取り組む目標を設定し、その目標を考慮した教育活動を行い、それを評価対象としている。つまり、教育「活動」や「内容」が、目標に沿って十分実施され、達成されているかを中心としている。したがって、個の子どものエピソードからスタートする日本版 SICS においても、議論が子どもたちの人間関係、活動のための園環境へも発展し、その結果が回答に反映したと考えられる。そのことの反面が、「個々の子どもをみる上で役に立った」と

いう質問への回答が高かった点にあるように思われる。平素、活動への視点を中心に行っているがゆえに、個の子どものエピソードからのスタートが個々の子どもの姿への視点を強めたと言えるのではないだろうか。一方、保育所の自己評価ガイドラインは、保育者自身の自己評価を中心としている。そして、保育所保育は養護と教育が一体となったものであり、乳児からの保育を行っている点からも個々の子どもを見る習慣は保育において基本となっている事柄ではないのだろうか。したがって、SICSの2つの視点によって、子どもの見方に変化があったとしても、個々の子どもに着目することは日常であり、その点に視点が当たりすぎていることによって、子どもたちの人間関係や園環境などへの議論が弱くなったのではないかと推測される。

4.2 園内研修における多様な意見の表出

上記のような違いがあるが、幼稚園、保育所ともに日本版SICSを使用した結果、園内研修に変化が出ている。

「意見が出やすく、共通理解がはかれた」(保育所)「形にとらわれずに気楽に話し合うことが出来る」(幼稚園)

「自分の考えを自分の言葉で振り返ることが出来る」(幼稚園)「共通で、具体的な視点を持つことが出来た」(両者)「議論が活発化した」(保育所)などが自由回答の質問で出てきている。5件法の質問では「保育経験に関わらず意見を述べる事が出来た」などの回答にその変化を見ることができる。

子どもたちのエピソードを「安心度」と「夢中度」という視点を定めて評定し、なぜそう評定したのかを自らの言葉で議論するという日本版SICSの特徴から来るものではないかと思われる。安心度と夢中度の評定から出発するので、当然議論は焦点化して進行する。評定したのは自分であるので、自分の言葉で話さなければならないし、話す視点が設定されているので、自由な感想を自由に話すよりも話しやすく、他者の意見も同じ視点からの意見なので、議論がかみ合いやすく、共通理解を生み出しやすくなったものと思われる。自由な観点から、子どもたちの様子をとらえて話すというのは、どの場面に着目するのか、どの観点からかという点で、保育経験の差が出やすく、経験豊かな保育者の発言が続けば、経験の浅いものは発言しにくくなると考えられる。今回の調査の自由記述の中に「映像を見ての意見に経験の差があった」という回答が1件あったが、経験の差によって意見に違いがあるのは当然のことであり、むしろ経験に差があっても発言ができるということが重要であるように思われる。その点で、日本版SICSは園内研修の発言量を

豊かにし、活性化するツールであると言える。

4.3 学び合い—園内研修の質の向上—

発言の活発な園内研修が産まれることによって、「様々な意見にふれることができた」という回答が高くなるのは当然かもしれない。そして、そのことによって「保育者同士で子どもの姿やエピソードの内容を共有でき」、「同僚とともに学びあうことができた」と言えることは、園内研修がまさに「学びの場」となっていることであり、「他の保育者から刺激を受け」ることのできる場であることを示している。「保育の中で子どもの『夢中度』や『安心度』を意識した」という質問に、幼稚園、保育所ともに高い回答が寄せられ、日常的により良い保育への意識が働いている様子がうかがえたが、園内研修においては、さらにその視点を豊かにする学び合いが行われていると考えられる。このようなことから、日本版SICSは「保育を自己評価するのに有効であった」という質問への回答の高さにつながっているものと思われる。

そもそも、新しい自己評価法である日本版SICSに関心を持ち、すでに自園の園内研修の方法がありながら、取り入れていこうとされている園が多く回答を寄せられていると推測される。したがって、素地として各園には園内研修による学び合いの雰囲気があったのかもしれないが、日本版SICSが提示した「安心度」と「夢中度」という視点が、一つの刺激となって、学び合いの質を高めていると思われる。

4.4 課題

日本版SICSは個々の子どものエピソードから保育を振り返る手順をとっている。したがって、議論をどのようにリードするかによって結果が大きく異なってくる。幼稚園からの回答では、子ども同士の人間関係、クラスの雰囲気、子どもにとっての園環境などへの意識も見られ、保育所に比べて高い回答だった。なぜこのようなことが生じたかを考えるとき、自己評価のためのガイドラインの違いによるものと推測できる。すでに述べたように、幼稚園のガイドラインは保育活動に焦点を当てていた。当然のことながら、個々の子どもをみながらクラス全体の活動が適切に運営されているかという視点で自己評価が行われる。一方、保育所のガイドラインは保育士等に視点がおかれている。保育士等の質の向上が保育の向上につながるという構図である。その通りであるが、養護と保育の一体化を目指す保育所にとっては、保育士の視点が個々の子どもに向けられる傾向が強いといえる。しかし、保育の質はクラス集団、園全体の環境、1日の保

育の運営等への配慮なくして向上しない。SICSの第2段階は、まさに子どもの実態とこのような側面との関係を議論し課題の発見へつなげるものであるが、残念ながら今回の保育所の回答からは、個々の子どもへの視点の強さは確認できたが、幼稚園に比べて、クラス集団、園環境などへの視点の広がり弱い結果となっており、視点を広げる議論の展開が日本版 SICS を利用する際の課題と言える。

同じことは、保育所の「自分の保育の良い点を見つめることができた」が低かった点についても言える。自己評価によってより良い保育を目指そうとするあまり、悪い点を取り上げて良くしようとする議論になってしまい、良い点へ目が向かなかつたのかもしれない。議論をどのように展開させていくか、議論のリード役が果たす役割は大きいと言える。

また、日本版 SICS は個の子どものエピソードからスタートするがその議論がどのように広がっていくのかによって、改善策は異なってくる。残念ながら、現段階では保育者の協働的な連携や1日の流れなどへの議論の展開は少なかったようだ。また、チェックリストの家庭との連携については、オリジナルの SICS ではなく、日本版に新たに加えたものであったが、上記同様そこへの議論の広がり少なかったようである。日本版 SICS の利用に当たっては、各園で利用しやすいように工夫すれば良いようにしており、例えば、このブックレットの実践事例集(秋田ら, 2011)では、ビデオを用いた研修会を行っている事例やチェックリストは使わないで行っている園も紹介している。したがって、利用に当たっては、自由度の高いものではあるが、まだ各園で定着したといえる段階にはなく、今後の各園の工夫に期待する点も大きい。それらに学びながら、より使いやすいツールとしていくことが求められていると言える。

5. おわりに

日本版 SICS の発売が2010年の3月であり、今回の調査は同年10月に開始した。各園がブックレットを手にしたのは、2011年度が始まってからではないかと推測される。すでに年間の計画等が決まってしまってからであり、園内研修に新しいツールを導入することは大きな決断が必要であったことと推測される。したがって、実際に使用しての回答数が限られた数になってしまったことは否めない。

しかし、回答数が少ないながらも「保育を自己評価するのに有効であった」「保育の質の向上に役立つ」という質問への回答の高さは、日本版 SICS への期待の大きさ

をうかがわせる。実際の使用に当たっては、幼稚園と保育所における違いが、それぞれの評価ガイドラインと関連しながら浮かび上がってきたが、実際に園内研修での議論が活発化し、学び合いが生じており、園内研修が活性化している実態を確認することができた。各園での工夫と定着が待たれるが、基本思想である「教育現場において子どもたちが経験していること、そのこと自体に焦点を当て、そこに子どもたちが参加していること、そこで生きていることが何を意味しているのか」を常に念頭に置きながら活用されていけば、日本版 SICS は園内研修の活性化、保育の質の向上に寄与するものであると言えるのではないだろうか。

引用・参考文献

- Laevers, F. (2004). Experiential Education - Effective learning through well-being and involvement, In OECD, FIVE CURRICULUM OUTLINES (pp.5-7), 2011年8月28日検索, <http://www.oecd.org/dataoecd/23/36/31672150.pdf>
- Laevers, F. (Ed.) (2005a). Well-being and Involvement in Care Settings. A Process-oriented Self-evaluation Instrument. 2011年8月28日検索, <http://www.kindengezin.be/img/sics-ziko-manual.pdf>
- Laevers, F. (Ed.) (2005b). Instructions. 2011年8月28日検索, <http://www.kindengezin.be/img/sics-ziko-checklist.pdf>
- Pianta R. C., et al. (2008) Classroom Assessment Scoring System, Paul H Brookes Pub Co
- 秋田喜代美, 芦田宏, 鈴木正敏, 門田理世, 野口隆子, 箕輪潤子, 淀川裕美, 小田豊 (2010). 子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために, 幼児教育映像制作委員会
- 秋田喜代美, 芦田宏, 鈴木正敏, 門田理世, 野口隆子, 箕輪潤子, 淀川裕美, 小田豊 (2011). 子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために 実践事例集, こども未来財団
- 埋橋玲子 (2004). 保育環境評価スケール① 幼児版, 法律文化社
- 厚生労働省 (2009). 保育所における自己評価ガイドライン

文部科学省 (2008). 幼稚園における学校評価ガイドライン

本論文は、財団法人こども未来財団平成22年度児童関連サービス調査研究等事業報告書『園内研修における自己評価法の活用に関する調査研究』平成23年3月に所収の「ブックレット『子どもの経験から振り返る保育プロセス』に関するアンケート調査」で用いたデータをさらに精査して、分析したものである。

謝辞

多忙な中、質問紙に回答していただきました園の方々にお礼を申し上げます。

(平成23年9月22日受付)